

新建福岡・NOW

第24号 2021.08.13

& PAST

発行元
新建築家技術者集団
福岡支部事務局
〒815-0041
福岡市南区野間 3-9-20-4F
【ケイ・プラッツ内】
Tel/Fax 092-541-8128
HP : shinken-fukuoka.net

2

26

仕事を語る会

「川内俊彦 建築を語る～次代の子供に託す 保育園～」

福岡支部は2月21日に50回目の誕生日を迎えました。51年目に入った支部最初の企画として、2月26日（金）、50年前に新建福岡を立ち上げた中の一人、川内俊彦さんによる仕事を語る会を行いました。語る会は今年度3回目となり、今回もリアルとZoomのハイブリットでした。参加者はリアルで8名、Web参加が5名でした。

講師の川内さんは、現在79歳、まだまだ現役です。長く保育園の設計を手掛けてこられました。今回のテーマは「次代に子供を託す 保育園」です。

福岡市の近況の町にできたある保育園のはなし。開設者や園長さん、そして地元の人を巻き込みながら、土地探しから行い、多くの人の協力により誕生しました。当初3000坪、60人定員でスタートし、4年後には6500坪、定員120名まで増員できました。敷地は採砂場跡の原野で、荒れた雑木の山は、親たちの手も加わって、またとない子供のあそびの舞台となりました。空き地は畑となりその作物に加え、給食では地域の農家・漁師とも食の連携が生まれました。また、園児の祖父母・地域の高齢者による「ジージバーバの会」が作られ、畑づくり、園庭の整備、水場作り、大工工事、まつりの舞台作りなど、地域の高齢者の活動の場が広がり、「物づくりの工夫、人とのつきあいかた、生活の知恵を、子・孫の代へ伝承する場面が園の“舞台”で観られるように」なり、開園して8年目には地域の高齢者もすっかり顔見知りになって町のコミュニティの一角に根を下ろしている存在となったそうです。

保育所が迷惑施設とされ、一方で待機児を解消するには数さえつくればよいといった政策に目を奪われているときにも、子供たちが大声で駆け回る声が聞こえてきそうな保育所の存在は希望が持てるものでした。

川内さんは語ります。「待機児童問題を解消し、子育てを支援するため、「経営」を民営化し市場にまかせる。チェーン店もOK！そのためには、最低基準をとっばらうこともやむを得ぬ……。こういった言分には、未来を託す子どもたちへの期待、子育て論、幼児教育論の視点は欠落している。」

今回紹介していただいた5ヶ所の保育園は、まちの中に造られたものであっても遊具や運動場よりも、森や

山や川がつくられており、子供たちが自然の中で育つような工夫が行われています。「植栽は実がなるものが良い」「あそびの庭、外のひろばを持てる小学校位の広さがあったらよい」

この様な川内語録は、実は46年前の「新建」第9号（1974年10月）に寄稿された「実行委員会方式による幼児施設づくり」という文章に原点があるようです。川内さんは、この文章に書いた思いを持ち続けながらの仕事について語っていただきました。ただ慣れない、Webでの語る会で、終了後には、想いが十分に伝わらなかったのではないかと悔いが残ったようです。

（報告：片井克美）



第 32 回全国研究集会

オンラインで、昨年 11 月から 11 分科会で延べ 50 回開催されてきました。福岡支部の会員が発表した報告の概要を紹介します。詳しくは、後日発行される報告集(有料 DVD)をご覧ください。
なお、8 月 29 日(日)に「第 32 回全国研修会のまとめの会」が Web 開催されます。

第 3 分科会：住まいづくり 大原家四代の物語（ご縁をつむぐ）

矢野安希子

独立してしばらく経ったころ、陶芸教室の仲間からのある家族を紹介された。1993 年、夜須町のご両親家の設計から始まったおつきあいが、2001 年、福岡市内でご本人家族の家の設計へとつながっていった。
そして、今年一月に電話をいただいた。終いの住まいとしてマンションに移るので、今までの家を、東京から帰ってくるご子息家族の新たな住まいとしてのリフレッシュ提案のご依頼だった。

- ① 夜須町の家 1994 年
- ② 唐人町の家 2001 年
- ③ 次男家族の住まいとしてリフォームが始まる 2021 年

1994 年、お父様、お母様の家から始まったご家族とのご縁。これから若い家族が、この住まいでどんな時を紡いでいくのでしょうか。

施主の思いを形に、空気に、時間に、置き換えていくデザインという仕事に出会えた事は、なんと幸せな事だったか。と、今回の発表の機会を通しての再確認でした。



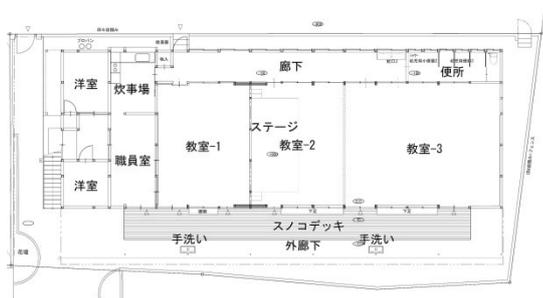
第 2 分科会：生活と福祉 古い木造幼稚園舎を福祉作業所へ

大坪克也

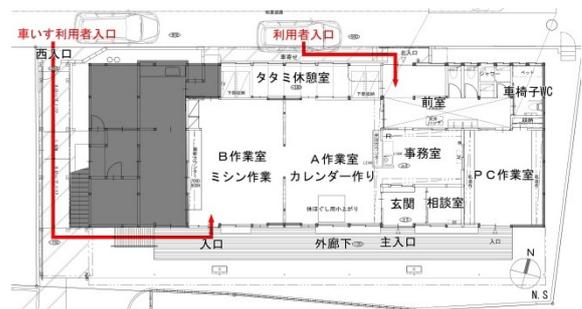
昭和 40 年に建てられた木造 2 階建ての建物。1 階はバプテスト教会に付属する幼稚舎、2 階は園長の住居として使われていた。幼児教育・保育の無償化のあおりを受け、無認可であった当園は 2020 年 3 月に閉園しており、この建物を改修して福祉作業所として使用できないか、NPO 法人「Well の会」より相談を受けた。

当法人は 1999 年に福祉作業所を開設。現在は、生活介護・就労支援 B 型の小規模多機能型事業所を運営している。利用者は登録 20 名で、半数が知的障がいや重複障がいをかかえる。そのほか車いす使用、視覚障がいの利用者である。視覚障がい者がテープおこしなどの作業を行うのは福岡市でも唯一とのこと。

数種類の作業の各々について人の動き、作業用設備をはじめ、音・光などの室環境要求が異なる。これらを整合させながら、古い木造園舎を活かしていくための課題は多かったが、木のぬくもりを残しつつ心地よい仕事の実現することができた。



▲ 改修前



▲ 改修後

第2分科会：生活と福祉 「SharedHome はたけのいえ-重い障がいをもつ若者たちの住まい-」

月成かや

「sharedHome はたけのいえ」は、数時間おきに痰の吸引や胃ろうによる経管栄養等の医療的ケアが24時間必要で、発話による意思確認ができない3人を含む重度の障がいをもつ25～27歳の4人の男女が住む家です。彼らの暮らしは、常に家族の介護がベースに成り立っていました。介護者である親の高齢化、親なき後のことを見据えた、地域で持続的に暮らせる新たな形を求めた、4人で集まって住む家への改修です。



4つの個室を設けること、リクライニングタイプの車いすでも動ける動線を確保する、この条件をクリアするのは、パズルのような作業でした。築40年超の木造住宅で、度々増改築を重ねていたこの建物は屋根の架け方が複雑で、平面を変更するにあたり、柱を抜くことができるか、動かすことができるか、構造の判断も難しく、大工さんと相談をしながら進めました。

「SharedHome はたけのいえ」と名付けられ、「どんなに病気や障がいがあっても地域で暮らし続けたい」という願いのもとに、単に「箱物(ハウス)」をシェアするというだけでなく、[ひと][もの][つながり]をシェアする暮らしを目指しています。ここでの4人の生活がはじまり、各個室・玄関をつなぐ位置に設けたLDKが、4人それぞれをサポートするヘルパー、看護師、家族、世話人たちが語り、くつろぎ、食事を共にする等、団らんの方に自然となり、4人の若者を中心とした大家族という雰囲気ができつつあるそうです。



建築とまちづくり 2021年6月号

特集「相談活動からみえる社会の変容と専門家の職能」のなかで、福岡支部会員の弁護士・鳥居玲子さんと越川佳代子さんによる「欠陥住宅問題～建築士業界への期待」と題した記事が掲載されています。ぜひご一読ください。

2021
6～8月
(計6回)

3期九州民家大学(前期)工学院大学理事長 後藤治先生を招き開講

昨年度は九州民家大学の実施は見送りましたが、今年は会場受講に加え、オンラインでのライブ受講も受け、北は北海道、南は沖縄まで計84名(うち新建会員19名)が受講しました。(伝統木構造の会九州地域会、日本民家再生協会九州・沖縄地区、新建福岡支部共催)

第3期『後藤治先生による～日本建築史と建築修復学を学ぶ～』をオンラインで受講しています。

4回受講を終えた現時点での感想は、『先生のお話の隅々まで面白い』です。建築の歴史を、毎回見方や切口を変えた先生の知見の授業 回を重ねるごとに、自身の理解がじわじわと深まっている印象です。

『実践する修復』を前提とした後藤先生の『建築史と建築修復学』は、自身の日々の設計業務上の小さな課題の解決策から、建築を取り巻く社会の大きな問題に対してどのように考えたらよいのか、自身の指針を決める基準づくりに、有益な学びとなっています。

『先生のお話が隅々まで面白い』のは、調査・修復の積み重ねによる裏付けあるものだという事(一言一句勉強になる)、『勿体ない』という基本的な考えが、人々の暮らしや、地域や資源、地球環境への愛ある『未来』への合言葉だと改めて確信できた事、実践で役立つ知見と同時に聞ける機知に富んだお話が面白いこと事からです。

まさに今、このような貴重な学びの機会を頂けたこと、先生と関係者の皆様に感謝します。

(報告：渡邊美恵)



瓦の留め付け基準が変わります

来年1月1日から屋根葺き材の緊結方法の基準が変わります。これは令和元年の台風15号による千葉県での被害を受けたものです。具体的には「瓦屋根標準設計・施工ガイドライン」によりますが、概要は以下になります。

- 瓦の留め付け箇所が、部分的→全ての瓦に
- 留め付け方法が、瓦の種類や部位、地域ごとの基準風速に応じて分類(左の表)

既に自主的にこの方法で施工されている設計者・施工者の方もおられると思いますが、今回の義務化でより重要性が高まった形です。

新築・増築のすべての建物に適用されますのでご注意ください！



(株式会社川崎構造設計 川崎薫)

部位別の緊結方法
緊結強度は銅線、鉄線<くぎ<ねじ

平部 ⇒ くぎ等で緊結

むね ⇒ ねじで緊結

軒、けらば ⇒ 3本のくぎ等 (くぎ又はねじ) で緊結

平部の瓦の緊結方法

瓦の種類	基準風速V ₀	30m/s	32~36m/s	38~46m/s
F形		くぎ等 2本で緊結	使用不可	使用不可
J形、S形				
防災瓦 (F形)		くぎ等1本で緊結		
(J形) (S形)		くぎ等1本で緊結		

風のいろ (第六話)

小形 ひさみ

前回のあらすじ

帰国前の雅子たちとの旅まで三ヶ月をきったころ、拓二の思いを受け入れたのり子は、限られた時間を濃く生きた。そして旅立ちの朝を迎えた。

朝からどんよりとした空だ。

半地下にある部屋の連続窓を開けはなして、のり子は振り返りながら精一杯の笑顔で言った。

「はい。本日出発します。」笑っているつもり顔がまた歪んで、拓二の胸に崩れ落ちた。

ヴァンルーサの駅から二つ目の駅前で、雅子達と合流する約束になっていた。一人乗り込んだ電車の窓から、見つめる拓二が消えていく。

私のデンマークが終わった。

雅子のフォルクスワーゲンでデンマークから南下し、海峡をフェリーで渡り、ミュンヘン、インスブルック、そしてイタリアのベローナからヴェニスさらに南下してフィレンツェと一ヶ月が過ぎる頃、三人で回る最期の地、ローマにたどり着いた。

「あと一日ね。」

最高だったわね。ベニスでね、コシユローの演奏会のポスターに気がつくなんて、さすが雅子。

「演奏が終わって丘の教会を出たら、家の窓にもなる灯りが、ほんと、宝石のようだった。」

「デンマークのくらしの締めくくりに、こんな素晴らしい旅ができたこと、本当にありがとう。」

デンマークを出て、そのまま日本に帰ってたら、次のスタートができないでいるかもしれない。一年半の滞在の最終章に記された拓二との時間は、のり子にとってまだ読みかけの物語のようで、日本に戻り、続くページを開く日があるのかどうか、自分にもわからなかった。

福岡に戻って間も無く、地元の百貨店で新たに新設されていたハウジング部設計室に、職を得た。責任者の部長は、その頃としては本格的な、国内に限らず世界の優れた家具や生活小物を扱う店として注目される『ニック』の立ち上げメンバーの一人で、出向から本店に戻り、住宅関連事業の展開を始めたばかりだった。

のり子のインテリアデザインの世界が本格的に動き始めた。モデルルームのインテリア計画がのり子の初仕事となった。実施の場で学ぶことも多く、のり子は刺激ある日々、拓二のいない現実を少しずつ受け入れていった。



5月21日金曜日のお昼時、梅雨の合間を縫って中央区天神の須崎公園に集まりました。東京支部丸谷博男さん経由で届いた福岡市民の訴えを受けたものです。

福岡市は市民会館の老朽化を受け、2016年、公園と一体的な再開発のプランをまとめました。内容は、現在の公園側に拠点となる文化施設を設置し、現市民会館側に芝生広場やレストランを整備するもの。その結果、エリア内400本の樹木の内、17本を残して伐採するという計画です。

一般の市民にはあまり知らされていないことで、公園のベンチで昼食をとるカップルに訊いてみても、「ええ〜っ？この公園に大きな建物が建つんですか〜？」と初耳の様子。

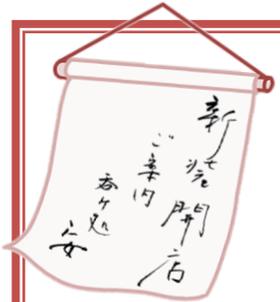
福岡の長い歴史を見てきた多くの木々たちを尊重し、温存できるような計画はできなかったのか、という疑問に始まり、都心の貴重な緑を多くの議論もなく伐採してしまう都市開発の姿勢、敢えて市民の耳目から遠ざけたのではないかと疑いたくなる行政決定の手法など、さまざまな不審がよぎります。伐採決行、の時期は迫っており無力感もありますが、少なくとも疑問の声を届ける意義はあるのかも知れません。

<その後>

7月31日、「須崎公園の樹木、伐採計画一転保存へ 住民の反発受け福岡市が変更」との新聞報道がなされました。市が住民の求めに応じ、400本の内100本を残し300本を園内または園外へ移植するというもので、住民の運動がひとつの成果を見たことは大変嬉しいニュースでした。

ただ、当初よりなぜそのような計画がなされなかったのか、という素朴な疑問もさることながら、都市の貴重な緑をいとも簡単に改変してよしとする基本姿勢に変わりはありません。引き続き問われるべき問題の本質です。

(報告：大坪克也)



呑みどころ 安 博多店開店の夜

太宰府に住んでいた頃始めた、呑みどころ(ごっこ)。中島夫婦の新婚旅行の旅の報告会をメインテーマとして、大いに飲んだ夜がきっかけだったと記憶している。梢ちゃんのイラスト入り報告書と、スクリーンには興味満載の写真が映し出され、スペインを満喫した。

全国同様仕事と共に(!?)お酒をこよなく愛す福岡のメンバー。時折集まってくださる我が家を、いつの間にか勝手に、呑みどころ 安、と呼ばせていただいている。

2019年の建まちセミナー後、コロナ禍で思うように声がかかれず、研究集会等で活躍するweb会議を参考に、たまにはグラス片手に、仕事から少し離れて軽〜く集まって語ろうと、6月16日呑みどころ安博多店開店の案内をさせていただいた。当日江藤さんと二人で、ほか福岡4名全国6名の参加の皆さんと多彩なテーマで盛り上がり、気づくと予定をはるかに超過した時間の早さに、改めて新建メンバーの魅力を再認識した夜。

偶数月の第3水曜日 19:00 次回もどうぞ、皆様のお越しをお待ちいたしております。(矢野安希子)

編集後記

なかなかリアル会議ができそうにない。相変わらずリモート例会や勉強会が続いている。遠方の企画にも気軽に参加できるというプラス面もあるが、その地へ足を運んでの会場の空気が、本当に懐かしい。今回の記事も大半がリモートによる活動報告で、こんな年もあったよね。と言える日がどうぞ早く来ますように。

(原稿とりまとめ：矢野

レイアウト：月成)

